

論文『三つの一神教における宗教と紛争』全10回

第5回、イスラームの発祥と共存体制

塩尻和子
筑波大学名誉教授

1、最後のアブラハムの宗教

イスラームは、共通の祖アブラハムに由来する宗教として、ユダヤ教、キリスト教と同一の「セム的」伝統を持つ兄弟宗教である。

近年までイスラーム地域内では教育、文化、金融業などの担い手としてユダヤ教徒、キリスト教徒が活躍した。現在でも中東地域にはキリスト教徒も多く住む。ユダヤ教徒とは長年にわたる「父祖伝来の仇敵同士」であるという表現は、一種の反イスラームの標語として今日でも用いられることがあるが、歴史的にも宗教的にも根拠がない表現である。実際に 1948 年のイスラエルの建国まで中東地域一帯では、ユダヤ教徒との平和的共存が続いていた。

イスラームでは、ユダヤ教徒とキリスト教徒を神が啓示した同種の聖典をもつものとして「啓典の民」（聖典の民とも）と呼び、イスラームの支配地域では一定の税金（人頭税、ジズヤ）を科して信教、居住、職業、移動の自由を保障し、「保護民」とした。イスラーム支配地域の税金としては、その他に、土地を持つ全住民に課す地稅（ハラージュ）があり、土地を所有する「啓典の民」は、人頭税と地稅の両方を払う義務があった。

初期イスラームの急速な拡大の理由としては、イスラームの支配が、当時のビザンティン帝国の支配に比べて政治的な抑圧が少なく、税金の率も低かったということが挙げられる。また前述のように信教の自由を認めており、宗派間の論争（特に三位一体論）には関与しなかったため、中東地域の非カルケドン派のキリスト教徒がイスラームによる支配を支持したことも大きな理由である。

「右手にクルアーン（コーラン）、左手に剣」という誤解と偏見に満ちた表現はキリスト教側の敵視政策によって発出されたものであるが、イスラーム側が武力を背景に改宗を迫った事実は、ほとんど見られない。イスラーム政権にとっては、啓典の民などの保護民から得られる人頭税の収入は国庫にとって非常に重要であり、この収入が減少することは大問題であった。そのために啓典の民のイスラームへの改宗を勧めてはいなかったのである。

2、興亡の略史

イスラームはアラビア半島の商業都市マッカ（メッカ）で興った。商人であったムハンマドが神の召命を受けて預言者となり、宣教活動を始めた西暦 610 年から、彼が死ぬ 632 年までに神から授かった啓示をもとにして展開した。当時のアラビア半島一帯は強力な血縁関係に基づく部族社会で、偶像崇拝の多神教を奉じていたために、ムハンマドが宣教する一神教は部族の一体感を乱すものとして強硬に反対していた。そのため、ムハンマドに

対する暗殺計画が実行される直前の 622 年に、彼は少数の信徒とともに生地マッカを逃れ、マッカの北方約 350 kmにあるヤスリブへと移住せざるを得なかった。ヤスリブの住民が近隣の部族同士の融和を図るために彼を調停役として招いたためであるが、その後、ヤスリブは「預言者の街」という意味のマディーナ（メディナ）と改名された。

ムハンマドはこの移住（ヒジュラ）によって本格的に教団を設立することができ、イスラームは大転回を迎えた。そのため、西暦 622 年の元日 7 月 16 日をヒジュラ暦（イスラーム暦）元年としたのである。

この移住、ヒジュラによって、イスラームは名実ともに世界宗教への道を歩むことになった。ムハンマドはマディーナの人々に対して宗教的指導者であるばかりでなく、政治的指導者としても能力を発揮し、宗教集団は同時に政治集団ともなった。間もなくムハンマドは故郷のマッカを征服し、632 年にマディーナで死去したが、その後、イスラームの支配地域は急速に拡大した。641 年に当時ビザンティン帝国の支配下にあったエジプトを征服し、661 年にダマスカスを首都とするウマイヤ朝と、749 年にバグダードを首都とするアッバース朝が相次いで成立した。711 年にはウマイヤ朝のイスラーム軍がスペインへ侵攻し、755 年にコルドヴァに後ウマイヤ朝が成立すると、1492 年にキリスト教徒側の領土回復運動（レコンキスタ）が成功するまでのほぼ 800 年近くの間、イスラームはアンダルシア地方を中心にイベリア半島を支配し、当時では最も進んだ科学技術を導入して、ヨーロッパの文明形成に大きな影響を与えた。1922 年にオスマン帝国が滅亡するまで、イスラームは、ある意味で政治的にも文化的にも世界の中心にあったのである。

3, 誤解される宗教

イスラームは、創唱者がアラブ人ムハンマドであるためにアラブ人に固有の宗教と思われるがちであるが、成立当初から共存と融合を掲げた世界宗教である。イスラームは当時のアラビア半島に根づいていた頑迷な血縁主義や部族主義を打破して、人種、国籍、身分にかかわらず、あらゆる人間は全知全能の神の前では絶対的に平等であると主張した。また、基本的な教義を崩しさえしなければ、各地の伝統や文化を維持することが認められ、大幅な土着化が許容されたために、瞬く間に世界中に広まった。

現在、イスラームは、世界中で 16 億人～20 億人ともいわれる信徒を抱える、世界第二位の宗教勢力であり、アフリカの大西洋岸から東南アジア、ヨーロッパ、中央アジア地域、中国の西北部まで分布している。インドネシアは約 2 億の人口の 90%がムスリム（イスラーム教徒）で、世界最多のムスリムが住む。アジアではほかにマレーシア、バングラデシュ、パキスタンなどがイスラーム教国である。インドにも人口の 13%、約 1 億 8000 万人のムスリムが住んでいる。アラブ諸国、つまり北アフリカや中東の国々はほとんどがイスラーム教国である。最近ではヨーロッパに 4600 万人以上のムスリムが住んでおり、北アメリカでもユダヤ教徒の人口を抜く勢いで増加している。

しかし、イスラームという宗教が、外側から偏見と誤解をもたずに眺められるということは、西暦 610 年にこの宗教が始まって以来、ほとんどなかった。ユダヤ教、キリスト教と同系の伝統をもつ兄弟宗教、つまり同系のアブラハムの宗教でありながら、最後に生まれた若い宗教として、特にキリスト教の側から差別され続けている。

しかし、発祥から 1400 年以上の歴史を通じて、イスラーム支配下では他宗教との間に

おおむね平和的な共存が実現しており、一旦廃れたギリシア科学を受け継いでヨーロッパの文化を発展させ、今日の科学技術の礎を築いた。繰り返しになるが、1922年のオスマン帝国の滅亡まで、イスラームは、政治的にも文化的にも世界の中心となっていたのである。

（この間の文明史については、拙著『イスラーム文明とは何か、現代科学技術と文化の礎』（明石書店）を参照されたい。

誤解され差別されつつも、その後もイスラームは世界に広がり続けている。しかも、その誤解と差別のなかにあっても、信徒数は年ごとに増加している。このことはなにを意味するのだろうか。この点を真剣に考慮することが、今日の世界と宗教との関連を考える上で重要である。

グローバリズムの進展のなかで、政治的にも経済的にも困難な時代を迎えているいま、世界第2位の宗教勢力を擁するイスラームについて、偏見や蔑視を排して、世界宗教としての理念と現実を学び、客観的で有効的な対話を進めることが必要であろう。今日、世界から誤解され軽蔑されることによって生じる様々な不平等や迫害が、戦闘的な過激派集団を生んでいることは、どの宗教にもどの国にも見られる現象であり、イスラーム社会だけの問題ではないからである。

4、「イスラーム」の意味

イスラームで信仰の対象となる「神」は「アッラー(Allah)」と呼ばれるが、これはアラビア語で「神」という意味であり、ユダヤ教にもキリスト教にも同じ唯一の「神」である。アラビア語に翻訳されたキリスト教の聖書でも、神はアッラーであり、アッラーという固有名詞ではない。一部の学者が多用する「アッラーの神」「神アッラー」などという表現は誤解を与えるので、本稿ではすべて「神」と表記する。

「イスラーム(al-Islām)」の意味は「服従、平定、平和」などで、ここから神に全てを委ねることという意味が生じて「唯一なる神への絶対帰依」という用語となる。宗教の名称なのに「教」をつけないのは、イスラームという言葉に「道、教え」などの意味が含まれているからであるが、日本語で「イスラム教、イスラーム教」などと呼んでも間違いではない。

イスラームの教えの特徴を簡潔に表現すれば、「神への絶対服従」「人類の平等」「相互扶助」となる。「神への絶対服従」と聞けば、頑迷な隷属や盲従を意味しているように感じられるかもしれないが、これはユダヤ教・キリスト教の「神への従属」「神への愛」、仏教の「仏への絶対帰依」などの教義と同じことを意味している。神に服従し神の教えを遵守することによって、人間の精神が救済され心の平安が得られるとすれば、イスラームもまた人間の不安を癒し、人生を導く「救済宗教」であるということができよう。

また「人類の平等」と「相互扶助」の教義も、キリスト教の「人類の平等」と「隣人愛」と変えることはない。しかもイスラームでは、「相互扶助」の実行を、基本的な儀礼である五行（信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼）のなかに喜捨（ザカー）という義務行為として設定している。この喜捨は、一定の税率を課す、いわば宗教税であり、貧者や未亡人、旅人など保護の必要な人々を、彼らが異教徒であっても、援助するために用いられる。モスクや宗教施設の建設などは、ワクフと呼ばれる有志からの財産寄進によって賄われる。つまり、人類に対する「隣人愛」の実践が、明確な義務の儀礼的行為となっている宗教は、

世界でもイスラームだけである。

5、在家の宗教

イスラームの根本的な思想は、信仰告白の「神のほかには神はない。ムハンマドは神の使徒である」という言葉に要約されるように、唯一の神と人間が向き合う単純で明快な教義である。この告白は二つの文章から成り立っている。最初の「神のほかには神はない」はキリスト教とユダヤ教に共通の一神教の告白である。これに「ムハンマドは神の使徒である」と第二の文章を組み合わせて、初めてイスラーム独自の告白文となる。

さらにイスラームで最も強調されることは、信徒が人間として普通の生活を送ることである。人は神の意図に従って両親から生まれ、教育を受けて成長し、宗教で定められた「法」を守って日常生活を送り、配偶者を得て家族を成し、次世代の信徒を育て、老いて来世へ戻り、永遠の生を生きる、という生き方が、神に最も喜ばれる生き方である。

イスラーム（特に90%以上を占める多数派のスナ派）では、キリスト教のように神と人間を仲介する「神の子」や「メシア」など、救世主の思想はない。ただし、少数派のシーア派（約10%以下の宗派で数多くの分派が存在する）にはイマーム（救世主）崇敬があるが、これはムハンマドの娘婿のアリー（第四代正統カリフ）とその子孫を無謬のイマームとして神格化したものである。

創唱者のムハンマドは最後の最高の預言者として尊敬されるが、「飯を食べ、市場を歩く人」というまったく普通の人間であるとされる。生涯に数度結婚をし、子どもも儲けた。ムハンマドの人柄や生き方は信徒の模範とされているが、他の宗教のように神格化は行なわれなかった。ムハンマドが存命中にもアラビア半島の殆どすべての住民がイスラームに帰依し、没後100年を待たずに地中海から西アジア一帯を覆う程の帝国を築き上げた宗教の創始者としては、聖者崇敬の対象にすらならず、全く神格化されなかったということは、実に不思議なことである。

イスラームは仏教やキリスト教とは異なり、出家や隠遁生活、修道院活動などを評価しない在家の宗教であり、政教一致的な理想をもっている。「政教一致」などというと、それこそ後進的な印象を与えるが、ヨーロッパ中世のような、宗教的権力が政治的権力を支配する事態を語っているのではなく、政治や社会の運営に宗教的な倫理が実現されることを理想としていることを指す。この意味では、どの宗教においても同様の倫理がみられるが、英語の「政教分離」が the separation of church and state であることも、これを意味している。宗教的権威が政治を牛耳るという「政教一致」は歴史の中で数多く見られるが、人類の歴史の中で、宗教の理想に基づいた倫理的な意味での「政教一致」が実現されたことは、イスラームにおいても、一度もないと言わざるを得ない。それだからこそ、キリスト教の「敵をも愛せよ」と同様に、イスラーム社会の理想とされるのであろう。

イスラームが在家の宗教であるという意味は、人間の霊的な側面のみを高位におくことをせず、精神的にも社会的にも普通の日常生活の中こそ宗教的な修行の場があるとする点にある。宗教法が、宗教儀礼だけでなく政治や経済、国際関係にまで直接の指示を与えているので、一般的な宗教の枠内には納まらない多様性がある。現在、多くの外国企業を悩ませている利子のない銀行や、独特のイスラーム金融なども、この宗教法に起因する。

イスラーム社会では、上に述べたように、出家や隠遁生活を評価しないので、原則とし

て聖職者を認めず、教会や本山にあたるような教団組織も持たない。そのために、宗教教義にありがちな「正統と異端」を判別する機関は存在しない。イスラーム共同体（ウンマ）の決定事項については、信徒一人ひとりの見解の一致が重要視される。しかし、預言者ムハンマドが生きていた時代ならともかく、イスラームが世界に広がった現代では信徒一人ひとりの意見を取りまとめることは不可能である。実際には共同体ウンマの見解に代わって、ウラマーと呼ばれるイスラーム法学者の見解の一致が実効力をもっている。

ウラマー（「学者たち」の意味）はイスラーム社会の指導者として、ある意味では聖職者の役割も果たしているが、彼らの見解や発言には「神聖性」は認められていない。しかも信者であれば誰でもウラマーの見解に従わなければならないと言うわけでもない。そもそも、多数派のスナ派では、ウラマーになるための学校も資格試験などもなく、イスラーム法について博識で尊敬される人々が、信者によってウラマーだと認められるという、ある意味で長閑な社会である。

政府の裁判官や判事として働くウラマーは報酬を与えられるが、在野のウラマーはウラマーとしての定職を持たず別に生業をもち、金曜日の集団礼拝の際などに、モスクで信者から無料の法律相談を受けることが多い。資格試験もない在野の法律家の判断は様々であるが、信者はどのウラマーの判断でも、自分の気に入った判断を採用することができる。

たとえば、アメリカ軍によって2011年に暗殺されたウサーマ・イブン・ラーディン（通称ビン・ラーディン）は、多数の信者によってウラマーであるとは認められていなかったが、自らウラマーであると称して、宗教法的な回答や見解を発出していた。本山制度や教会組織を持たないイスラームでは、誰でもが指導者にも宗教法の専門家にもなれるが、その真偽の判断は信者に任されている。

ただし、少数派のシーア派ではウラマーを養成する教育機関が整備されていて、厳格なヒエラルキーが存在する。時折、新聞などのマスメディアでウラマーについて、「イスラーム聖職者」とすることがあるが、これはシーア派には適合するが、イスラーム世界の90%以上を占めるスナ派には当てはまらない。

6、聖典クルアーン、神に逢う言葉

イスラームの聖典であるクルアーンは、神がアラビア語を聖なる言語として選び、そのアラビア語でムハンマドを通して人類に下した啓示をそのまま書き留めたものである。そのためにクルアーンのすべての章句は一言一句、紛れもない永遠の神の言葉であると考えられている。これが他の宗教の聖典や経典と比べて最も異なる点である。いわば著者は神であり、外典や偽典などは一切ない。

神がムハンマドに語りかけた言葉は、そのまま信者に語りかけられる神の言葉である。ムハンマドの死後はもはや神の言葉が下ることはなくなったが、信者はクルアーンを朗誦することによって、神と向き合い神の語りかけに接することができることとされている。

クルアーンは全部で114章あり、前半にはおもに後期のマディーナ時代の啓示が、後半には前期のマッカ時代の啓示が纏められている。内容は唯一の神への服従の命令、終末の警告、宗教儀礼、社会生活や家庭生活上の法規範、慣習、政治的理念や国際関係などにまで及ぶ。しかし、クルアーンの記述は日常的な会話表現と商売用語で綴られており、月並みな道徳訓や断片的な警句などの繰り返しが多く、物語性に欠けている。

物語としては無味乾燥なクルアーンが 1400 年にわたって世界中の人々をひきつける秘密はアラビア語にある。クルアーンはアラビア語の韻を重視した散文学の傑作であり、アラビア語で朗誦することによって音楽性や芸術性が表現される。また同じ文章の繰り返しは、聞く者を陶酔の境地へといざなう力をもっている。

クルアーンは神に選ばれた聖なる言語アラビア語で記されているために、原則として翻訳が認められていない。しかし、翻訳不可のひとつの理由は、外国語に翻訳すればその独特の音楽性が失われることである。

実際には内容を知るために各国語に翻訳されているが、翻訳されたものは正しい聖典とはみなされていないので、儀礼には使うことができない。信徒は母国語が何であれ、クルアーンを詠むときは、アラビア語で書かれたそのままのクルアーンを詠まなければならない。日本人の改宗者は、アラビア語の聖典が読めるようになるまでは、アルファベットやカタカナで発音を書いてもらい、それを暗唱することで礼拝に参加していると聞いた。

聖典の言語がアラビア語に限定されていることは、宗教の拡大に不利になるのではないかと思われるが、実際には歴史を通じて、イスラームの伝播とともにクルアーンという言葉としてのアラビア語が定着することによって、広範な地域にイスラームの宗教とアラビア語という言語に基づく文化的一体感を生じさせてきた。これが各地に発生した 1300 年を超えるイスラーム政権の支配を支えてきたのであり、今日もなお信徒数を拡大させている要因なのかもしれない。

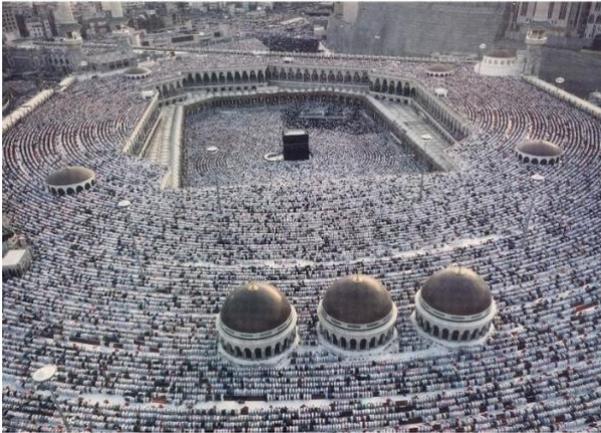
アラビア語は聖典クルアーンに聖なる言語として採用されたことから、現在に至るまで、アラビア語の基本的な文法や語彙はクルアーンの記事を基盤として保持されている。そのために西暦 7 世紀以降、おもに書き言葉である正則語には文法上の変化は少ない。現在でも正則アラビア語の文法は、クルアーンのアラビア語に基づいているために、7 世紀から現代まで文法的には現代文と古典文の差は少ない。

繰り返しになるが、イスラームの聖書であるクルアーンは、神が人間の言葉「アラビア語」で人類に下した啓示をそのまま書き留めたものである。クルアーンのすべての章句は一言一句、紛れもない永遠の神の言葉であると考えられている。これが他の宗教の聖典や経典と比べてもっとも異なる点である。その意味ではクルアーンは「神が語る人間の言葉」であり、聖典記者が靈感に打たれて記したとされているキリスト教の聖書は「人間が語る神の言葉」となろう。双方の聖典の言葉は同様に「神の言葉」と規定されるが、実際に人間が聞いたままとを結集したとされる聖典はクルアーンだけである。

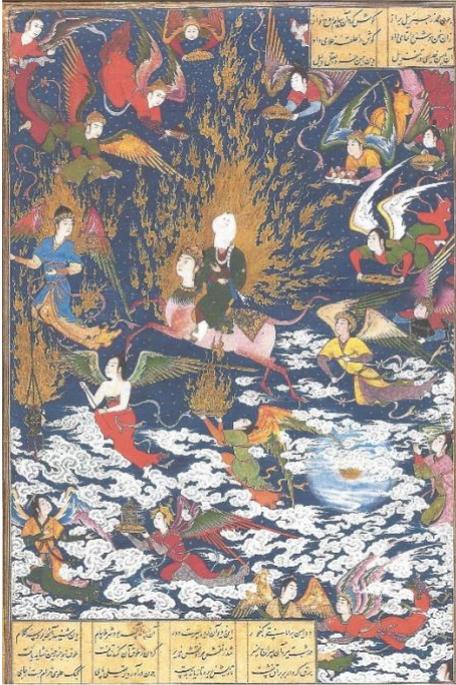
写真資料



預言者ムハンマドが大天使ガブリエルから神の言葉を授かる様子、14世紀、ペルシアの歴史書『集史』の挿絵。イスラーム世界では肖像画を描くことは禁止されていないが、それを崇拝する「偶像崇拝」は厳格に禁止される。イスラームでは、ムハンマドの顔まで描いた挿絵は珍しい。(エディンバラ大学所蔵)



毎年、イスラーム暦9月にマッカで催される義務の巡礼の光景。真ん中の黒い四角形の箱が聖カアバ神殿で、イスラーム信仰の中心とされる。預言者ムハンマドがこの中に収蔵されていた偶像をすべて排除したために、中は空になっている。今年の義務の巡礼は6月26-28日に行われる予定である。(サウジアラビア大使館提供)



ムハンマドは伝道の過程で、ある夜、神によってマッカからエルサレムへ飛ばされ、天使に案内されて、エルサレムの岩のドームの巨石から天馬に乗って天の諸階層などを見たのちに神の前まで至ったとされる。これはこの様子を描いた絵画「天上飛翔の図」。偶像崇拝を避けるために、ムハンマドだけ顔が描かれていない。1539-43年頃、サファールヴィー朝時代のペルシアのミニアチュール。(大英博物館所蔵)